

佐々きみ菜 個展

SASAKI Mina solo exhibition

KUNST ARZT

www.kunstarzt.com

冥護の抱擁

Embracement of Secret Blessing

KUNST ARZT では、佐々きみ菜の個展を開催します。
佐々きみ菜は、「うまれ」や「祈り」、「生と死」をテーマに、4つの表現プロセス（*）を実践するアーティストです。ファイバーで構築するオブジェは生命体のように、空間構成の際、照明によって壁面に生み出される陰影は、とても印象的です。また、それをさらに衣類へと再構成し、纏ってパフォーマンスすることで、テーマを追求してきました。

「信濃の国 原始感覚美術祭」に4年連続で参加し、ミレーによる名作絵画『オフィーリア』を彷彿させるかのような湖に満開となった睡蓮の花を背景に、作品を纏った美しいパフォーマンスが記録されました。

「生と死」を追求してきたアーティストの一つの到達点のようにも思えます。ご注目ください。

(KUNST ARZT 岡本光博)



うまれの祈りシリーズ

2020

「信濃の国 原始感覚美術祭 2020」

での作品を纏ってのパフォーマンス

* 4つの表現プロセス

1. メイキング：繊維を素材に制作
2. インスタレーション：展示空間を作品として発表
3. コスチューム：衣服へと再構成
4. パフォーマンス：自らまとい身体表現する

展覧会コンセプト

小さなウイルスの蔓延により、私たち人間の社会では、人と人の触れ合いが良いことではなくなってしまいました。大切な人に会えたときも、決して近づき過ぎないように、手と手が触れ合うことのないように配慮して日々を送っています。問題になっているウイルス以外の無害なウイルスも、とにかく取り除き、無意識に存在を排除することで、自分たちの営みをなんとか死守しようと、まさに未知の戦いを続けている最中です。

ここで立ち止まって、自分の内側が今求めている感覚を探ると、湧き上がってくる身体感覚は、〈抱擁〉でした。海を眺めている時だったり、山からくる風が肌を撫でる時だったり、陽の光を浴びている時だったり、大きなものからの恵みを受けて包まれるような抱擁を、私の身体は強く求めている、と、そのようなことを思います。

神さまや仏さまたちが、私たちの知らないところで私たちに加護を与えてくれるように、肌で触れることは叶わなくても、包まれることで得られる安堵を私は形にしたいと思います。そして多くの人にこの作品と光によってうまれる模様の影に触れてほしいです。帰りたい時に帰りたい場所へ帰れなかった、すべての人へ捧げます。

略歴

1995年 大阪生まれ

2017年 成安造形大学空間デザイン領域テキスタイルアートコース卒業

2015年 2人展「胎内回帰」ピースギャラリー TANADA

2017年 個展「うまれの祈り」MU 東心斎橋画廊

2017-2020年 「信濃の国原始感覚美術祭」長野県

2020年 「世界で一枚のシャツ展」ギャラリーサラ

2021年3月23日（火）から28日（日）

12:00 から 18:00

会 場：KUNST ARZT

605-0033 京都東山区三条神宮道北東角 2F

問い合わせ



KUNST ARZT 代表 岡本光博

090-9697-3786

kunstarzt@gmail.com

佐々きみ菜 個展
SASAKI Mina solo exhibition



冥護の抱擁

Embrace of Secret Blessing

アーティスト・ステートメント

本当のことが知りたいと、小さな頃から心の中で呟いていました。
その想いは、熱をもって私の身体の中でじっとしています。
そして、中心から広がる波紋のように、胎動しています。

それは、顕微鏡で細胞の形を目にした時に
「人の手に及ばないものこそ、本物の美しさをもっている」
と感じた気持ちとも重なって、今でも変わらずに身体の中で燃えています。

体内から発生するこの熱は、扱いを間違えると、
自分の身を痛めるような厄介なもので、
自分の手を動かし、何かを作り続けることで、コントロールしてきました。

私の表現には、4つのプロセスがあります。

繊維を素材に制作すること、
展示空間を作品として発表すること、
衣服へと再構成すること、
自らまとい身体表現すること。

そうやって循環するサイクルの中で、
私は、「生まれ」や「祈り」、「生と死」について考えます。

日々の暮らしの中で私が認知する間も無く、
自分の細胞が生まれ、役目を果たして死んでいくこと。
私自身もそれらの細胞と同じように、
何かしらの役目を担って生き、いつの日か活動を終えます。

限られた時間の中で生まれる熱と共存しながら、
手を動かしてものをうみ、考え、披露し、
それをきっかけに人と出会うことまでを含めて、
自分の役目だと感じ、つくることを続けています。



胎盤

2015

ウール

1000×800 mm

胎内回帰シリーズ。

二十歳に成長した自分の身長に合わせて、
綴れ織りで胎盤を制作した。



うまれの祈りシリーズ

2020

糸 900×1000 mm

長野県にある湖・木崎湖に向けたうまれの祈りを形にした。

糸を特殊加工しミシンでレース状の布を制作した。



ははむすめ

2016

モール

2100×1200 mm

胎内回帰シリーズ。

大人1人が胎内に入れる大きさの母体を、
モールを使って制作した。